

自己評価報告書

平成23年5月13日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520077

研究課題名（和文） 西欧各国および東アジアにおける受容から見たニーチェ—耽美主義とナショナリズム

研究課題名（英文） Reception of Nietzsche in Eastasian und European Countries - Between Estheticism and Nationalism

研究代表者

三島 憲一（MISHIMA KENICHI）

東京経済大学・経済学部・教授

研究者番号：70009554

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：社会思想史

キーワード：ニーチェ、受容、耽美主義、ナショナリズム

1. 研究計画の概要

19世紀のドイツの思想家ニーチェはヨーロッパの中でも、また東アジアでも多様な読まれ方をされてきた。ドイツでは、生の哲学と結びついた生活改革運動のなかで広く読まれ、第一次世界大戦後はナチスの政治運動にも利用された。しかし、イタリアやフランスではダヌンツィオやジイドに代表されるように、芸術のための芸術という芸術革新運動と結びついた。アメリカ出身のイサドラ・ダンカンには新しい舞踏にニーチェの思想を組み込んだ。日本では初期の高山樗牛でも芸術と生活の一致という耽美主義の枠組みで読まれたが、やがて和辻や西谷のような教養主義的な求道者精神の中で読まれ、政治的には保守的な動きを支えることになった。またドイツ哲学では、ハイデガーのニヒリズム論の基盤となった。さらに中国では、5・4運動にゲーテと並んで大きな影響を与え、朝鮮半島でも、在日の朝鮮人留学生を中心に明治の後半から広く読まれ、自主独立の意識に大きな栄養を与えている。こうした多様な読まれ方を、それぞれの地域や国における多様な近代化（multiple modernities）の理論を媒介に検討し、そこにおける耽美主義とナショナリズムの癒着の種々のありようを検討することが課題である。

2. 研究の進捗状況

研究は順調に進行している。

第一年度：ドイツ、フランス、イギリス、イタリアなどヨーロッパ各国におけるニーチェの受容の相違は、日本におけるニーチェ受容が上述の国々と異なるのと本質的に異なる

らない。そのことを明確にするためにそれぞれの国における近代化の特質と相互干渉を明らかにすることに留意した。また、ニーチェにおける歴史的教養批判、啓蒙主義批判がそれぞれの国でどのように受容されたかを明らかにした。

同時にダヌンツィオらにおける耽美主義とナショナリズムの結合のあり方が三島由紀夫におけるニーチェの読みなどに直接影響を与えているのか、あるいは、事柄の必然に根ざす構造的ものであるのかを確認するために、資料収集を行った。

第二年度：前年度にはじめたニーチェとダヌンツィオと三島由紀夫の関係について一定の見通しが得られた。また、韓国におけるニーチェ受容についての資料収集も現地で行った。さらに、ハイデガーの見たニーチェ、ローティの見たニーチェ、デリダの見たニーチェというように、思想方向ごとのニーチェの読み方の原因や背景の考察を勧めた。やはり、ナチズムとの近さと遠さがニーチェの読み方に大きな影響を与えていることがわかる。特にドイツとフランスの受容を中心にこの問題の深化をはかった。特にフランスのポスト構造主義におけるニーチェ受容は興味深いとともに、いささか自由連想の観がある。

また、交錯する近代の理論をアイゼンシュタットやアーナソンを参考に深め、こうした近代化論とニーチェ受容の関係をどのように組み合わせたら有効であるかについて、さまざまな考察を行った。

第三年度：戦前における中国、韓国におけるニーチェ受容の歴史が、日本の進出への批判と明確に結びついていることをさまざまな手

段で確認した。1919年の5・4運動の学生たちにニーチェの『ツァラトストラ』がゲーテの『ウェルテル』と同じにさまざまな形で読まれていたことは、よく知られているが、それについてのさまざまな研究を検討した。また、明治後半から大正にかけて東京在住の朝鮮人学生が刊行していた『學の光り』という雑誌（ハングルと漢字まじり文）には、文学者や思想家として後に対日抵抗運動で有名になった人々によるニーチェを含む西洋思想の読まれ方がよく見て取れる。自らの青雲の志と、祖国の独立への思いとがニーチェを介して表現されている。一部は翻訳が必要であったが（翻訳料を本研究費から支出した）、この雑誌を介して、日本経由のニーチェ受容と、独特の植民地的近代（colonial modernity）のありようが浮かび上がって来た。また、ベンヤミンとニーチェの内在的関係も解明し、自著の中で論じることができた。さらには、これまでの成果をふまえた論集も出版できた。

3. 現在までの達成度

現在迄は、ほぼ当初の目論見通りに進行し、全研究計画の8割方が達成されたと考えている。

4. 今後の研究の推進方策

複雑に交錯するさまざまな近代（multiple modernities, entangled modernities）の枠組みでニーチェのさまざまな受容のされ方を、ドイツ、フランス、イタリアなどの西欧各国にかぎらず、日本、韓国、中国などに関して検証し、特に耽美主義とナショナリズムの入れ子関係について検討する。その際、東と西、近代的と前近代的といった古典的な文化論や社会理論の区別にとらわれずに、政治的反抗と政治的抑圧の両極の間で揺れ動いたニーチェ像記述の新たな概念枠組みをさぐる。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

① 三島憲一、世界はニーチェをどう読んできたのか。（『ニーチェ入門』河出書房新社、2010, 11, pp. 65-88.

② 三島憲一、ニヒリズムのはなしは無意味だからやめよう。（『大航海』2009年6月号 pp. 12-35,

③ Kenichi Mishima, Die japanische Nachkriegsaufklärung und die Rolle von Habermas, Blätter für deutsche und internationale Politik, 5, 2009, pp. 75-88.

④ 三島憲一：ヴァールブルクの仕事（岩波文庫『蛇儀礼』の解説論文）（2009年、岩波文庫 pp. 165-202

⑤ 三島憲一：西欧近代のトポスとしての歴史哲学-普遍主義と個別主義の抗争（岩波講座『哲学』第十一巻 2009, pp. 19-48.）

〔学会発表〕（計3件）

① 三島憲一、和辻哲郎と象徴天皇（社会思想史学会、2010年10秋、神奈川大学）

② Kenichi Mishima, Regression of the fin-de-siecle aesthetics to the radical nationalism

Some Remarks to the theme Mishima Yukio and Nietzsche（2010年3月、ベルリン自由大学、三島由紀夫死後40年シンポジウム）

③ Kenichi Mishima, Traditionsbegriff in der Kritischen Theorie und Ostasien, (2008年9月)フランクフルト大学シンポジウム、中国における批判理論）

〔図書〕（計2件）

① 三島憲一、ニーチェ以後（岩波書店、2011年3月）総ページ252ページ。

② 三島憲一、ヴァルター・ベンヤミン-収集、破壊、記憶（講談社学術文庫、2009年12月）総ページ330ページ。